上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿
―― 李商隠篇(13) ――

門 脇 廣 文

Commentary on the Four Poems of Li Shang-yin in the *Tang-shi jian-shang ci-dian* (Dictionary for the Appreciation of the Tang Poems. Published by the Shang-hai Dictionary publication Company) — A Draft Translation with Annotations.

KADOWAKI Hirofumi

[目　次]

はじめに

[49] 銀河吹笙　陳伯海

[50] 重有感　劉学鍇

[51] 夕陽楼　劉学鍇

[52] 春雨　余恕誠

はじめに

昨年度（2004年度）にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隠詩についての賞析文の訳注稿四篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学文学部非常勤講師の三枝秀子、学部卒業生の関久美子（現在、東京学芸大学教育学部非常勤講師）、後藤庸介、大学院博士課程後期課程３年の宮下聖俊、秋谷幸治、博士課程前期課程２年の鈴木拓也、大学院研究生葉山恭江、そして私（門脇）の８名である。現在、[70]涼思の翻訳を行なっている。なお、今回の担当者は次の通り。

[49] 銀河吹笙　宮下聖俊

[50] 重有感　沼尻俊裕

[51] 夕陽楼　関久美子

[52] 春雨　三枝秀子

[49]

銀河吹笙	銀河吹笙
悵望銀河吹玉笙	銀河を悵望して玉笙を吹き
楼寒院冷接平明	楼寒く院冷きに平明に接す
重衾幽夢他年断	重衾 幽夢 他年は断たれ
別樹羈雌昨夜驚	別樹 羈雌 昨夜驚く
月榭故香因雨発	月榭の故香 雨に因りて発し
風簾残燭隔霜清	風簾 残燭 霜を隔てて清し
不須浪作緱山意	浪(ほしいまま)に作すを須ひず 緱山の意を
湘瑟秦簫自有情	湘瑟 秦簫 自ら情有り

李商隠の愛情詩の中で、〈銀河吹笙〉がその例として取りあげられることはあまりない。しかしこの詩にはいささか特別な部分があり、注目する価値はある。

1

さっと読んだだけでは、この詩の意味はよくわからないと感じられる。

李商隠の詩は、時として比喩があまりに深遠かつ複雑であったり、めったに使われない典故が用いられたりする。そしてそれらが李商隠の詩をわかりにくくしている。しかし、この詩には何の隠喩の手法も用いられていない。最後の一聯に用いられている、王子喬が緱山で鶴に乗って飛び去る(1)、湘水の神霊が瑟を弾く(2)、秦女（弄玉のこと）が簫を吹く(3)、という三つの典故もよく見かけるものであり、言葉自体は決して難しいものではない。

ところが、一句一句を続けて読んでみると、やはり言わんとしていることがはっきりとはわからないのである。「あの時の夢は断たれてしまった」と言ったかと思えば、「昨夜鳥が啼いていた」と言う。また、どこにあるかわからない「月見のための高殿とそこに漂ってきた香り（月榭故香)」を、目の前にある「カーテンと燃えつきそうな灯火（風簾残燭)」と同じ次元で詠んでいる。このように、実際の情況と空想とが混然としてひとつになっているので、読む側にぼんやりとしてはっきりしない印象を与えるのである。

しかし実際には、詩人の気持ちの変化をとらえたならば、この詩のストーリーを追うことも難しくはないのである。

2

――それは夜が明けるか明けないかという時刻のこと、この時詩人はすでに起きていた。空高くかかる「天の川（銀河）」が目に映り、笙を吹く音が聞こえてきた。さらにからだには、夜明け前の肌寒さを感じている。

笙の音に触発されたからだろう、過ぎ去りし日の事がまた心に浮かんできた。だがあの幸せに満ちた甘美な思いは、あの人が逝くのとともに、まるでひとときの「はかない夢（幽夢）」のように永遠に消え去ってしまったのだ。あまりの悲しさに、詩人は思わず、窓の外のこずえで夜通し鳴いていた雌鳥にまで心を寄せる。あの鳥もひょっとして自分と同じく伴侶を失った悲しみを胸に抱いているのではないか、と。

そして昔のことを思いおこすうちに、かつてあの人と過ごした故郷の月見台がぱっと脳裏に浮ぶ。その庭にあった花ざかりのあの木は、おそらくついこの前降った雨が花を開かせたのだろう、美しいその姿はなんと愛らしいことか。

だがそう思った刹那、幻の情景は消え去ってしまった。後はただ、目の前でカーテンが風にゆれ、消えかけた灯火が揺らめき、窓の外の霜を照らしているだけである。

夢から覚めてしまったいま、この憂いに満ちた心をどのようにまぎらわせようか。鶴に乗り笙を吹いたという王子喬が、仙人になる修行をする後を追おうか。ひょっとしたら、この日夜胸にわだかまっている現実世界のしがらみから抜け出すことができるかもしれない。ああ、妄想はやめよう。やはり湘水の神霊が瑟を弾き、秦女が簫を吹いたという故事にならい、胸に秘め続けているこのひたむきな愛情と向き合っていこう。

3

以上が詩全体を通してのだいたいの筋である。この詩は、まず見たり聞いたり感じたりした目の前の物に触発されて、過ぎ去りし日の喜びに満ちた感情への追憶や、昨夜鳥が鳴いていたことへの思い入れが生まれる。次に、遠く隔たった故郷の庭で花が咲いているという想像へと跳躍し、その後はまた目の前のカーテンと消えかけた灯火という現実の風景へと引き返す。そして最後に、さらに神仙に関する伝説によって生まれた奇想天外な空想を経て、自分の胸中に秘める深い情に帰結している。

時間も空間も超越し混交しており、表現された個々ものどうしにはもはや表面的なつながりはない。そこに始めから終わりまで一貫しているのは、ただ意識の流れだけなのである。それは瞬時に様々に変化し、また複雑に入り組んでいる。これこそが、李商隠の詩歌の、最も人に驚きを与える点であり、往々にして最もわかりにくいとされるところでもあるのだ。

4

〈銀河吹笙〉は決して特別な例ではない。李商隠の一部の無題詩や「長吉体」(4) をまねたいくつかの詩は、程度の違いはありながらもすべてこのような構想の仕方をとり入れており、いくつかの共通する特色が見てとれる。

例えば、時間や空間の順序、あるいは道理や論理によって材料を組み立てるという伝統的な方法をうち破り、人間の直感的な心理活動の筋道に従って、時間や空間に対し錯綜するという形で反映させている。あるいは実際の状況と虚構の世界とが混在しており、そこに表現されたものどうしのつながりは、その表面的な過度の結びつきをいくぶん排除している。さらには、このことによって生まれる詩句間の飛躍性が大きく、甚だしくは、ある程度の難解さを帯びている、といった具合である。

このような詩は、その弊害ももちろん持ち合わせてしまうけれども、心理的な変化のわずかな曲折を表現するということについて言うならば、有利な点もある。したがって、色とりどりに咲き乱れるがごとくのたくさんの詩歌の中で、この種の詩に一つの地位を与えることを惜しむべきではないのである。

陳伯海（宮下聖俊訳）

---

(1)王子喬が緱山で鶴に：王子喬とは、周、霊王の太子。名は晋。もと姫姓。直諫して廃せられ、庶人となる。好んで笙を吹き、鳳鳴をなす。伊洛の間に遊び、道士浮丘公と嵩山に上ること三十余年、緱氏山に登仙し去った。

(2)湘水の神霊が瑟を弾く：湘霊とは“湘夫人”のことであり、舜の妃とも伝えられる。舜を慕って湖水のほとりまでやってきたが、その崩御を聞き身を投げて死に、湖水の神になったという。「湘霊鼓瑟」とは詩篇の名であり、湘水の神霊が瑟を鼓すということである。唐の銭起の作。かつて江湖に出かけたとき、どこからともなく二つの句が聞こえてきた。その翌年、崔暐が「湘霊鼓瑟」という詩を作ろうと試みたときに、そのときに聞いた句を末句とした。その当時の人々はこのことを鬼謡といったという（《唐詩紀事》より）。

(3)秦女（弄玉のこと）が簫を吹くこと：《後漢書》の注に引かれる〈列仙伝〉によれば次のようにある。弄玉は、春秋秦の穆公のむすめ。穆公により、簫を吹いて鳳をよい声で鳴かせる簫史に嫁がされる。簫史は弄玉に簫の吹き方を教え、弄玉が簫を吹けば鳳が鳴き、その家の屋根に飛んでくるまでになった。このことから穆公は、鳳台を作った。その後、弄玉は鳳に乗り簫史は龍に乗って、ともに昇天し去ったという。

(4)長吉体：長吉とは、中唐の詩人、李賀の字。すなわち「長吉体」とは、李賀詩に見られる、幻想的な作風の詩を指すものだと考えられる。《滄浪詩話》詩体篇には、詩の体（スタイル）の一つとして「李長吉体」をあげている。

[50]

重有感	重ねて感有り
玉帳牙旗得上游	玉帳　牙旗　上游を得
安危須共主君憂	安危　須らく主君と憂ひを共にすべし
竇融表已来関右	竇融の表は已に関右より来たる
陶侃軍宜次石頭	陶侃の軍は宜しく石頭に次(やど)るべし
豈有蛟龍愁失水	豈に蛟龍の水を失ふを愁ふる有らんや
更無鷹隼与高秋	更に鷹隼の高秋に与(あ)ぐる無し
昼号夜哭兼幽顕	昼号夜哭　幽顕を兼ぬ
早晩星関雪涕収	早晩　星関　涕を雪ぎて収めん

太和九年（835）十一月、宰相の李訓と鳳翔節度使の鄭注は、唐の文宗の意を受け宦官の皆殺しを秘かに謀った。しかし企みは失敗し、李訓と鄭注は相次いで殺され、企みに加わっていなかった宰相の王涯や賈餗、舒元輿らまでもが一族皆殺しの憂き目に遭った。他にも連座させられた者は千人あまり、「宮中の至る所が流血に染まり、死体の数は万にのぼる」(1)という惨禍を招く結果になった。歴史上、「甘露の変」と呼ばれる事件である。

事件ののち、宦官はいよいよ驕り高ぶり、「皇帝を脅迫し、宰相を見下し、役人をごみのように扱う」(2)ようになった。そこで、開成元年（836）の二月と三月に、昭義軍節度使の劉従諫が二度にわたって天子に上奏した。王涯らが何の罪もなく殺されたことを強く訴え、宦官が「勝手に軍権を占有して略奪している」(3)ことを非難したのである。そして次のように言った。

> お与え下さった土地を治め、兵士を鍛え、内にあっては陛下のもっとも信頼のある部下となり、外にあっては陛下の守りとなりましょう。もし悪心をいだく臣下がおり、その人物を制御するのが困難であれば、私が命をかけて陛下の周りをお清めすることをお約束いたしましょう。(4)

さらに劉従諫は人を派遣して宦官の仇士良らの罪悪を暴き出した。そのためしばらくの間、宦官の横暴ぶりはやや治まった。

李商隠は、この「甘露の変」という事件とその後も朝廷に存在し続ける深刻な事態に感じるところがあって、この詩を作ったのである。先に甘露の変について〈有感二首〉という詩をすでに作っていたので、この詩は〈重有感〉という題にしている。このような詩題は、実質的には無題に近い。

1

第一句（玉帳牙旗得上游）の「玉帳牙旗陣営の、玉で飾ったとばりや象牙で飾った旗」とは、劉従諫が強力な軍隊をもち、有力な藩鎮のひとつであることをいう。昭義軍節度使は沢州や潞州(5)など

を管下におき、また首都長安にほど近く、軍事上最も有利な場所にあった。そこで、「得上游（上位を占める）」というのである。

この句は含みのある書きぶりで、劉従諫が実力も条件も充分であり、宦官の専横を治められるだけの主観的客観的な条件をすべてそなえていることを際立たせている。そのうえで、そのあとすぐ第二句（安危須共主君憂）で、本当に言いたいことを明らかにしているのである。それはつまり、国家が危急存亡の秋であれば、藩鎮という立場である以上は当然君主と一緒に憂いをともにすべきである、ということである。（「安危」ということばは偏義複詞[6]で、ここでは「危」の意味で使われている。）

句中の「須（～しなければならない）」字には作者の意図がもっともよく表れており、義理として果たさなければならない責任を強調している。もし「須」字を「誓（ちかう）」字に改めたのなら、その意味は単なる称賛に変わってしまう。「須」字がここで用いられることが、以下の句で「宜しくすべし」「豈に有らんや」「更に無し」などの言葉ひとつひとつの拠り所となっている。

2

第三句（竇融表已来関右）、第四句（陶侃軍宜次石頭）はそれぞれ典故が使われている。

後漢の初め、涼州牧の竇融は、光武帝が北西の軍閥である隗囂の討伐を考えていることを知り、すぐに兵力を整え、上奏して隗囂討伐の出兵の日取りを伺った。[7]ここではこの典故を使って、劉従諫が上表して宦官を糾弾したことを指す。

また、東晋の陶侃が荊州刺史であった頃、蘇峻が謀反を起こし、首都の建康に危機が迫った。陶侃は蘇峻を討伐する諸軍の盟主に推され、兵を率いてただちに石頭城下に至り、蘇峻を斬った。[8]ここではこの典故を使って、劉従諫が進軍して宦官の乱を平定することへの期待を表している。

一聯のなかで似たような性質の典故を使って、ともに同一の人間を指している場合、本来なら単なる繰り返しにおちいりがちである。しかし、李商隠によって典故が用いられる場合には、それぞれ重きをおいている内容（上表と進軍のことをそれぞれ指す）にちがいがある。典故をとらえる角度もまた同じではない（第三句はすでに起きたこと、第四句はまだ起きてないこと）。加えて対句の前後に「已（すでに）」と「宜（よろしくすべし）」の二つの助字を使って二句をつなぎ呼応させている。このことは、劉従諫が上表して「陛下の周りをお清めしましょう（清君側）」と公言したにもかかわらず、まだ行動に移してはいないという状況に合致するだけではない。劉従諫に対して褒め称えもするが不満をいだくところもあり、期待もするが何らかの失望は免れないという李商隠の複雑な感情をも、正確かつ詳細に表現しているのである。

「将に次るべし」と言わず、「宜しく次るべし」と言っている点には、劉従諫の「命をかけて陛下の周りをお清めすることをお約束いたしましょう（誓以死清君側）」という公言を、李商隠がさほど楽観視していなかったことがまさにあらわれている。「宜」字には、激励や催促の意味があり、さら

に軽い批判と非難とが内に含まれているのである。

3

第五句（豈有蛟龍愁失水）、第六句（更無鷹隼与高秋）には、それぞれ比喩が使われている。

「蛟龍 水を失ふを愁ふ」とは、文宗が宦官に押さえつけられて権力と自由を失ったことを喩えている。「鷹隼 高秋に与ぐ（「与」は「挙」に通じる）」とは、朝廷に忠誠をつくす勇猛な将軍が奮いたって宦官に立ち向かうことを喩えている。（「鷹隼」の喩えは、《左伝》文公十八年、「君に対して礼をつくさぬ人間を見たら、たかやはやぶさが小鳥や雀を追いかけるように、遠慮することなく誅罰せよ」[9]の意味を使っている。）

前者の「蛟龍 水を失ふ」とは、本来ありえないことである。しかしそれが既成の事実となっているのだ。だから「豈有（どうしてありえようか）」を用いて激しい憤りと、このような事態に対する許しがたい思いを表現しているのである。また後者の「鷹隼 高秋に与ぐ」とは、「蛟龍 水を失ふ」という状況のもと、当然現れるべきなのに結局いまだ現れていない局面を指している。だから「更無（まったく無い）」ということばを用いて、深い憂いや憤りと、強い失望感を表現しているのである。

紀昀は「『豈有』『更無』ということばは、反語（否定）と全否定の表現が呼応している。第五句は文宗が宦官に拘束される道理のないこと、第六句は文宗が宦官に拘束されている理由について説明している」[10]という（《李義山詩集輯評》に引く）。この見解は、李商隠の意図にわりに沿ったものである。第二句の「須べからく共にすべし」や第四句の「宜しく次るべし」と関連させて吟味してみると、口先ばかりで実際に行動せず、「鷹隼」になれるのに結局「鷹隼」にならない者への不満や失望が、その中に暗に含まれていることを、よりはっきりと感じ取ることができる。

4

最後の二句（昼号夜哭兼幽顕、早晩星関雪涕収）は、第六句を受けた内容になっている。「更に鷹隼の高秋に与ぐる無し」だからこそ、今の都では依然として、人も幽霊も昼夜を問わず泣き叫び、あたり一面痛ましく恐ろしい雰囲気がただよっているのである。いったいいつになれば、宦官に巣くわれた宮殿を取り戻して、涙をぬぐって喜び祝うことができるのだろうか。「早晩」とは、つまり「多早晩（いつか）」であり、不定を表すことばである。最後の二句が表しているのは、国家の命運について憂えるあまり焦りをいだく作者の気持ちである。

5

「有感」ということばを政治について感慨を述べた詩の詩題としたのは、杜甫が最初である。[11]李商隠のこの詩は、国家の命運に関心をよせるという精神と、律詩で時事を反映し政治的な感慨を書きあらわすという杜甫から始まったすぐれた伝統を継承しているが、それだけにとどまらない。風格が重々しく曲折していること、事柄の用い方が厳密かつ適切であること、そして助字がよく練られていて、それらが相互に呼応していることなどの面において、すべて杜甫の律詩をまねる工夫がみられるのである。

この詩の風格は、杜甫の〈諸将五首〉とよく似ている。その構想は、

独使至尊憂社稷　　独り至尊をして社稷を憂へしむ

諸君何以答升平　　諸君 何を以てか升平に答へん

ただ至尊の天子ばかりに社稷のことをご心配させ申しているのではすまぬことではないか、諸君はこの升平の恩沢に対し何事を以て之にお答えしようとするのであるか。[12]

というこの二句に啓発されたのかもしれない。しかし、李商隠の後期における杜甫をまねた詩（たとえば〈籌筆駅〉〈二月二日〉など）と比較した場合、前期のこのような作品は、十分に練られ重厚である点についてはあまりあるが、変化に富んでいるかどうかという点については、物足りなさを感じざるをえないのである。

劉学鍇（沼尻俊裕訳）

---

(1)原文は「流血千門、僵尸万計」。《資治通鑑》

(2)原文は「迫脅天子、下視宰相、陵暴朝士如草芥」。《資治通鑑》

(3)原文は「擅領甲兵、恣行剽劫」。

(4)原文は「修飾封疆、訓練士卒、内為陛下心腹、外為陛下藩垣。如奸臣難制、誓以死清君側」。

(5)《旧唐書》巻三十八、地理志の序言には「昭義軍節度使。治潞州、領潞・沢・邢・洺・磁五州」とある。昭義軍は唐の上元年間、相州に置かれ、河北省大名道の南部、河南省河北道の西部の地を領す。潞州は今の山西省長治県。沢州は今の山西省晋城県の東北。地理的には洛陽の北東にあたる。

(6)偏義複詞：対になる意味をもつ言葉で構成されているが、意味がそのどちらか一方に偏っている熟語のこと。例えば「多少」など。

(7)《後漢書》巻二十三、竇融列伝第十三に「(竇)融既深知帝意、乃與隗囂書責讓之曰、…。囂不納。融乃與五郡太守共砥厲兵馬、上疏請師期。」とあるのに基づく。

(8)《晋書》巻六十六、陶侃伝などに記載がある。《晋書》によれば、この蘇峻の乱が起こった時の陶侃の地位は、荊州刺史ではなく征西大将軍であった。

(9)原文は「見無礼於其君者、誅之如鷹鸇之逐鳥雀也」。訳は鎌田正氏（新釈漢文大系）による。

⑽原文は「豈有、更無、開合相応。上句言無受制之理、下句解受制之故」。

⑾杜甫には〈有感五首〉〈節有感二首〉という題の詩がある。

⑿杜少陵詩集巻十六〈諸将五首〉の二の第七、八句。訳は鈴木虎雄氏（続国訳漢文大成本）による。

[51]

夕陽楼	夕陽楼
花明柳暗繞天愁	花明かるく 柳暗く 天を繞(めぐ)りて愁ひ
上尽重城更上楼	重城を上り尽くして 更に楼に上る
欲問孤鴻向何処	問はんと欲す 孤鴻 何処へか向かはん
不知身世自悠悠	知らず 身世 自ずから悠悠たるを

この詩は、唐の文宗の太和九年(835)秋に書かれたものである。

作者が詩題に付した自注には、「(夕陽楼は) 滎陽(けいよう)にある。今は遂寧にいる知人の蕭侍郎が、滎陽の長官だったときに造られた。」[1]とある。滎陽とは、鄭州のことで、李商隠の第二のふるさと（原籍は懐州）である[2]。「今は遂寧にいる蕭侍郎」とは、当時、遂州（剣南東道に属す）[3]に左遷されていた、刑部侍郎の蕭澣[4]を指す。蕭澣は、太和七年三月から太和八年末まで鄭州刺史を務めており、夕陽楼は、彼の鄭州での在任期間中に建てられたものである。李商隠は蕭澣から重用され、厚遇を受けていた。それゆえ自注で蕭澣のことを「知人」[5]と呼んでいるのである。のちに、蕭澣は遠く遂州に流される。

李商隠は夕陽楼に登り、そこでの景色に触発されて、悲しみに胸を痛める。そして、万感胸に迫り、この味わい深い詩を書き記したのである。

1

前半二句（花明柳暗繞天愁　上尽重城更上楼）は、楼に登って遠くを眺め、その景色に触発されて、愁いが生じたことを描いている。

「花が色も鮮やかに咲き誇り、柳が茂ってほの暗い陰をつくる（花明柳暗）」とは、本来、人の目を喜ばせ心楽しませる、美しい景色である。だが、心に悲しみを抱いている詩人の目には、愁いや恨みを呼び起こすものとして映るのである。

李商隠は、比較的低い身分の出であり、「知己」による理解や助けを、なにより大切に思っていた。だが一年前、李商隠のことをことのほか評価し目をかけていた崔戎[6]が、兗海(えんかい)観察使の在任中に急逝した。そして今、李商隠に厚意をもって接してくれた、もう一人の知己である蕭澣までもが遠方に流されていく。これにより、自身が孤独で寄る辺ないことを、李商隠はいっそう強く感じたのである。しかも、李商隠は科挙の試験に二度失敗しており、そのことも、自らの不遇に対する悲しみをさらに深めたに違いない。加えて、朝廷では、李（訓）・鄭（注）が権力を握って党派間の争いが熾烈になる一方で、宦官がその専横ぶりをエスカレートさせていた。[7]このように、時代が個人の身の上に落とした暗い陰が、この繊細で感情豊かな詩人を、より感傷的かつ敏感にしたのである。

「天をめぐって愁う（繞天愁）」という表現は、愁いの感情が綿々と続くさまや、複雑に絡み合うさまを表したものである。のみならず、高いところに登って遠くを眺めたという特定の情景とも、見事にマッチしている。

一、二句目は、実際の順序どおり、まず城壁に登り楼閣に登って、その後景色に触発されて愁いが生じたとすべきところである。しかし、ここでは「花明柳暗繞天愁　上尽重城更上楼」と、順序を入れ換えている。これは、ひとつには、詩人が高いところに登って遠くを眺めたときに感じた、とめどない愁いを際だたせるためである。同時に、城壁に登り楼閣に登ったという叙述に、叙情的な意味合いを色濃く帯びさせ、曲折や停頓のニュアンスを表現するためでもある。「上り尽くす」、「更に上る」といった強調の語気からは、高所に登り遠くを眺めたことによってもたらされた心理的重圧の耐えがたさが伝わってくるかのようだ。

2

三、四句目（欲問孤鴻向何処　不知身世自悠悠）ではもっぱら、楼上から眺めた際に目にした、群れから離れた雁が南へ向かう光景について感慨を述べている。

天空を仰ぎ見れば、どこまでも果てしなく広がっている。ただ、群れから離れた雁がぽつりと、夕日の残光に照らされながら、一羽孤独に遠くへ飛び去っていくのが見えるだけである。その光景は、詩人がいま訪れている夕陽楼の景色と相まって、遠方へ流されていく孤独な蕭澣の姿を、ごく自然に連想させる。そして蕭澣の不幸な身の上に対する同情や、この先の運命に寄せる思いが、心の奥底から湧わき起こるのである。だからこそ、群れから離れたあの雁に「尋ねてみよう（欲問）」という句が存在するのだ。

だが、まさにこの瞬間、李商隠ははたと気づく。自分の身の上も、そもそも秋空を一羽ゆくこの雁同様、孤独で寄る辺なく、漠としてままならぬものである。自分はまさに「自身の身の上も、あちこちを転々とさすらい続けるものであったことに気づいていない（不知身世自悠悠）」状態にあったのだと。

この二句のよさは、主に、ある典型的な人生経験を明確に描き出している点にある。他人の不幸な身の上に同情を寄せる人物が、自分こそがそもそも人から同情されるべき不幸な人間であることに気づいていない、そんなことが往々にしてある。しかし、その人物がひとたびそのことにふと思い至ってしまうと、ついには、自分には同情してくれる人さえもう現れることはないのだと気づく。「群れから離れた雁（孤鴻）」でさえ、その身に関心を寄せる者がいるというのに、自分はその雁にも劣るのである。そこには、より深い悲しみ、より深刻な悲劇が潜んでいる。

馮浩は三、四句目について、「悲しみや嘆きの描き方が入神の域に達している」[8] と述べている。馮浩も、まさに上述の視点から捉えて解釈したものであろう。さらに言えば、「問はんと欲す（欲問）」、「知らず（不知）」とポーズを置くことが、「悲しみや嘆きの描き方が入神の域に達している」という

その芸術的風格を構成する、まさに重要な要素となっているのである。

謝枋得[9]は、次のように述べている。

もし、その身の上の転々とさすらい続けるさまが、群れを離れた雁に似ていると言うだけなら、その意味は浅薄なものとなる。「欲問」、「不知」の四字は、詩の言わんとするところを余すところなく伝えている。[10]（《畳山詩話》[11]）

詩人の意図するところを十分に汲んだ、着眼鋭いすぐれた評語である。李商隠の七言絶句における「寄託するところが奥深く、ことばの言い回しが婉曲だ」[12]（葉燮《原詩》[13]）という特徴が、この詩の中には見事に具現されている。

劉学鍇（関久美子訳）

---

(1)「滎陽にある。今は遂寧にいる知人の蕭侍郎が、滎陽の長官だったときに造られた。」：「在滎陽。是所知今遂寧蕭侍郎牧滎陽日作者。」なお、「牧」を「収」または「守」に、「者」を「矣」とするテキストもあるが、ここでは《唐詩鑑賞辞典》の原文および《李商隠詩歌集解》の校訂に従う。

(2)滎陽とは、鄭州のことで、李商隠の第二のふるさと（原籍は懐州）である。：年譜（《李商隠詩歌集解》付録）によれば、李商隠は懐州河内（かだい）（今の河南省北部）の生まれで、のち鄭州の滎陽県に移る。その後、父の赴任（814年・李商隠三才）に従い浙江で暮らすが、父の死（821年・李商隠十才）により、母とともに鄭州に帰り、以後、当時滎陽に隠居していた父の従弟（従叔）のもとで、弟とともに経典や文について学びながら、数年を過ごしたとされる。

(3)遂州（剣南東道に属す）：遂州（遂寧）は、今の四川省遂寧県。剣南東道は、唐代の行政区画（当時は全国を十道に分けていた）のひとつ。

(4)蕭澣：蕭澣の生卒年等については不明。《李商隠詩歌集解》の按語によれば、蕭澣は李宗閔等の党派に属し、太和七年三月に鄭州刺吏となり、のち八年十二月に刑部侍郎となった。だが、李宗閔の党派をこころよく思っていなかった李訓や鄭注によって、李宗閔等とともに貶められ、太和九年七月に遂州刺吏となり、さらに八月には司馬に降格させられた。李商隠とは鄭州在任中に知り合い、目をかけるようになった。のちに李商隠が崔戎の知遇を得たのも、蕭澣の推薦によるところが大きいという。

(5)「知人」：原文は「所知」。

(6)崔戎：唐・博陵の人。字は可大。明経に挙げられる。官は華州刺史を経て、のち兗海沂密観察使となる。太和七年に李商隠が華州を訪ねて以来、もともと李商隠の親戚筋（従表叔）にあたる崔戎は、蕭澣からの推薦もあって、李商隠のことをことのほか可愛がった。太和八年三月に崔戎が兗海観察使となったおりには、李商隠もこれに随い兗州へ赴いたが、同年六月に崔戎は病死する。

(7)朝廷では、李（訓）・鄭（注）が権力を握って党派間の争いが熾烈になる一方で、宦官がその専横ぶりをエスカレートさせていた。：当時の朝廷は様々な問題を抱えていたが、そのひとつが、い

わゆる「牛李の党争」である。李徳裕率いる貴族派と、牛僧孺・李宗閔等の進士及第派との間で繰り返されてきた官僚たちの政権争奪戦は、勃発から十数年たった当時も、依然として激しい攻防が続いていた。一方で、朝廷内では宦官が権力をほしいままにしており、これを憎んだ文宗は側近の李訓や鄭注と宦官誅殺をはかる。宰相となった李訓が鄭注とともに「甘露の変」を起こした（太和九年十一月）のは、この詩の書かれた直後と思われる。

(8)「悲しみや嘆きの描き方が入神の域に達している」：「悽惋入神」。《玉谿生詩集箋注》に「自慨慨蕭、皆在言中、悽惋入神」とある。

(9)謝枋得：（1226-1289）南宋・戈陽の人。字は君直、号は畳山。宝祐の進士。宋の滅亡後、元にとらえられ、絶食して死す。著書に《畳山集》があるほか、《文章軌範》の編者として知られる。

(10)もし、その身の上の転々とさすらい続けるさまが、群れを離れた雁に似ていると言うだけなら、その意味は浅薄なものとなる。「欲問」、「不知」の四字は、詩の言わんとするところを余すところなく伝えている。：「若只道身世悠悠、与孤鴻相似、意思便浅。欲問、不知四字、無限精神。」

(11)《畳山詩話》：南宋・謝枋得撰。原書はすでに佚しており、《詩林広記》に二十六条が残るのみ。

(12)「寄託するところが奥深く、ことばの言い回しが婉曲だ」：「寄托深而措辞婉。」

(13)葉燮《原詩》：［46］〈瑶池〉の注(14)・(16)を参照。

[52]

春雨	春雨
悵臥新春白袷衣	悵臥(ちょうが) 新春 白袷衣(はくこうい)
白門寥落意多違	白門 寥落 意(い)多く違(たが)ふ
紅楼隔雨相望冷	紅楼 雨を隔てて 相望むこと冷やかに
珠箔飄灯独自帰	珠箔(しゅはく) 灯(とう)を 飄(ひるがえ)して 独自(ひとり)帰る
遠路応悲春晩晩	遠路 応に悲しむべし 春晩晩(はるえんばん)たるを
残宵猶得夢依稀	残宵 猶得たり 夢依稀たるを
玉璫緘札何由達	玉璫(ぎょくとう) 緘札(かんさつ) 何に由ってか達せん
万里雲羅一雁飛	万里 雲羅(うんら) 一雁飛ぶ

1

春雨が降り続くある朝、詩の中の登場人物である男性は合わせの白い着物をまとったまま、暗い気持ちで身を横たえている。彼の心の中にはいったい何が隠されているのだろうか。そしていったい何故こんなことになってしまったのだろうか。

詩は、まず、第一句に「悵臥（暗い気持ちで身を横たえる）」ことを詠んで、その後に短くまとめて「白門寥落意多（白門はあれはててなにごとも思いのままにならない）」と説明を加えている。南朝の民謡〈楊叛児〉[1]に

暫出白門前　　暫く出づ　白門の前に
楊柳可蔵烏　　楊柳 烏を蔵す可し
歓作沈水香　　歓(あなた)は作る沈水香(じんすいこう)[2]
儂作博山炉　　儂(われ)は作る博山炉(はくざんろ)[3]

ちょっと白門の前へ出てみると、柳がしげって烏が隠れるのにちょうどよくなっている。烏が寝るのなら、わたし達も寝るとしようか。あなたは沈香の用意をして、わたしは博山の香炉の用意をしよう。

という歌がある。これによると、「白門」[4]とは男女の逢瀬の場所を指しているようだ。かつて逢瀬をかさねた場所は、いまはさびれ果て何とも寂しく、あの人の姿ももう見えない。この愛した人との別れによる失意、これこそ彼が憂いに満ち暗い気持ちで身を横たえる原因なのである。

2

「悵臥」しているあいだ、彼の気持ちは揺れ動いていた。最後に相手を訪ねたときの情景、「紅楼

隔雨相望冷、珠箔飄灯独自帰（紅楼 雨を隔てて 相望むこと冷やかに、珠箔（しゅはく） 灯（とう）を 飄（ひるがえ）して 独自帰（ひとり）る)」を思い返していたのである。愛する人が住んでいたなじみの「紅楼」は以前のままである。だが、彼は入っていく勇気がないばかりか、それに近づく勇気さえもなく、雨にけぶる「紅楼」をただじっと見つめているだけだった。あの頃はあんなにも親しみや安らぎを感じた「紅楼」だったが、今はこのようにさびしさの漂う場所となっている。

この「紅楼」の前に、彼はどれくらいたたずんでいたのか自分でもよくわからなかったのかもしれない。やがて、彼は周りの家々のあかりがすでにともり、あかりの灯った窓の前をよぎる雨が、真珠を連ねた簾のようになっていることに気づく。そしてこの真珠の簾のきらめきのなか、長くて寂しい雨の道を、彼はぼんやりと歩きながら一人でようやく帰ってきたのであった。

3

彼はこのように茫然としたままで、愛した人の面影がずっと頭から離れずにいた。そのことを第五・六句に「遠路応悲春晩晩、残宵猶得夢依稀（遠路 応に悲しむべし 春晩晩（はるえんばん）たるを、残宵 猶得たり 夢依稀たるを)」とのべている。彼は、遠くにいるあの人もきっと過ぎゆく春に心を痛めていることだろうと想像している。けれども、今は蓬山のように遠く離れているから、ただ明け方（残宵）に見る儚い夢の中でぼんやり（依稀）とあの人の姿を見ることしかできないのだ。

4

強い気持ちに動かされ、彼は手紙（緘札（かんさつ））を書き、玉の耳飾り（玉璫（ぎょくとう））をその手紙に添えて、自分の気持ちの証とした。これは相手に捧げる切なる思いである。だが、道のりはるかに遠く、またいくえにも障害が立ちはだかっているので、使者がいても、それをどう送り届ければよいのだろうか。しかも、窓の外の空を見上げると、暗く厚い雲が遠く果てしなく続いている。もしも手紙を運ぶ雁がいたとしても、この網を広げたような曇り空を通り抜けて行くことができようか。それが第七・八句に「玉璫緘札何由達、万里雲羅一雁飛（玉璫（ぎょくとう） 緘札（かんさつ） 何に由ってか達せん、万里 雲羅（うんら） 一雁飛ぶ」と詠まれている。

5

以上がこの詩によまれている世界のおおよそのところである。主人公の男性の境遇、行動、心情、などはほぼはっきりしている。だが、読者にとってわかりずらいのは、それが具体的にどのような人とのどのような恋愛であったのかについてだけである。作品そのものから見ると、愛した人は、おそらくなんらかのやむをえぬ事情により遠く離れていってしまったのだろう。封建社会の恋愛や

結婚が自分の思うようにならないという状況にあっては、それはしかたないことである。

李商隠はかつて〈柳枝五首〉の序に、洛陽のある女性が彼に思いを寄せたが、不幸にも「東諸侯に娶られ（東諸侯取去）[5]」てしまい、残念なことになってしまったといっている[6]。〈春雨〉の中では相手が「遠路 応に悲しむべし 春晩晩たるを」であろうと推測し、さらに、その当時自分の置かれていた状況が「万里雲羅」のようであったと感じていた。そのことからこの恋愛も、もしかしたら「東諸侯」のような権力者に邪魔されたことと関係しているかもしれないということがわかる。しかし、結局は推測するしかなく、具体的な背景については、今日にあっては知るすべもないのだ。

6

李商隠はこの詩において、美しくそして人を感動させる具体的なイメージを愛情に結びつけている。詩は、けぶるような春の雨に、主人公のもうろうとしている心情や、ぼんやりとした夢の中の世界、晩春（春晩晩）や、遠く連なる雲（万里雲羅）などの自然の景色をとけこませている。それによって、別離の寂しさや、思いの深さをきわだたせ、これらが渾然一体となった芸術的世界をつくりあげている。

第三・四句の「紅楼隔雨相望冷、珠箔飄灯独自帰（紅楼 雨を隔てて 相望むこと冷やかに、珠箔灯に飄して 独自帰る）」は、第三句の色彩「紅」と感覚「冷」が互いにコントラストをなしている。「紅」という色はもともと暖かみのある色である。しかし雨に隔てられて寂しくそれを眺めることにより、反対にそれを「冷（寂しい）」であると感じるのである。第四句の「珠箔（真珠で飾った簾）」はもとは鮮やかで美しいものである。だが、その「珠箔」をわざわざともしびの前にだして雨の簾の幻覚の喩えとしている。そして主人公の寂しくそして呆然としている心理状態が事細かに描き出されている。

最後の第七・八句の「玉璫緘札何由達、万里雲羅一雁飛（玉璫 緘札 何に由ってか達せん、万里雲羅 一雁飛ぶ）」も象徴性に豊んでいる。創造性豊かに自然の景物を借りて、「錦書託し難し（手紙が届きにくい）」[7]の予感を具体的なイメージとしてあらわしている。そして失意に呆然としている心情をどこまでもつづく曇り空と一体化させている。

これらは、主人公の生活や境遇や感情、そして情景や色調や雰囲気などをみごとに表現している。だからこの詩を読んだ人たちはいつまでも忘れることができない。誠実で人を感動させる感情と、美しく生き生きとしたイメージがひとつに合わさり、芸術的な魅力となっている。この魅力の前に、人は共感せずにおれなくなってしまうのだ。

余恕誠（三枝秀子訳）

(1)〈楊叛児〉：楽府、清商曲辞、西曲歌の一つ。斉の隆昌年間に、楊旻(ようびん)が時の何后の寵愛をうけた。そのことを譏った民謡。《楽府詩集》四十九。《玉台新詠》巻十。

(2)沈水香：沈香の異名。沈香とは、香木の名。

(3)博山炉：香炉の名。彝器の上に山の形を刻して装飾したもの。

(4)白門：西南の方角や西の方角のことを「白」で指す。「白門」は西の方角にある門、という意味であろう。金陵のこと、徐州のことなどという説もある。

(5)東諸侯取去：〈柳枝五首〉の序に「為東諸侯取去矣」とある。「東諸侯」はある身分の高い方、という意であろう。

(6)〈柳枝五首〉の序に、洛中の柳枝は〈燕台詩〉を詠んだ私のことを気に入ってくれ、「博山香」を用意してあなたの来るのを待っているからと誘われたので、それに応えることにした。だが、結局はたせなかった。やがて譲山に「あの子はどこかの身分の高い方のお嫁さんになったよ（為東諸侯取去矣)」と告げられた。とある。

(7)錦書託し難し：陸游の〈釵頭鳳(さとうほう)〉に「錦書難託」の句が見える。

春如旧　人空瘦　　春は旧(むかし)の如(まま)なれど　人は空しく瘦せゆく
涙痕紅浥鮫綃透　　涙の痕は紅(なまめか)しく鮫綃(うすぎぬ)を浥(ぬ)して透る
桃花落　閑池閣　　桃の花は落(ち)り　池のほとりの閣(たかどの)は閑(しず)かなり
山盟雖在　錦書難託　　山盟(ちかい)は在れと雖も　錦書(たより)は託し難し
莫莫莫　　莫(ああ、やんぬるかな)　莫莫

思いがけず、別れた妻に偶然再会してしまう。妻は母に気にいられず、二人はやむなく別れることになってしまった。別れてから十年たっても、互いに忘れることができずにいた。すでにお互い再婚し、この再会でも、お互い見つめることしかできずにいたのであった。その再会の場面がここに詠まれている。

(2005年９月26日受理)